

「現代陶芸研究における工芸的造形という観点と素材」

宮川智美（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）

陶を素材とする表現は、日本では特に 1950 年代以降多様化し、それらをいかに位置付けて論じるのか模索されてきた。日本の現代陶芸の端緒を開いたとされる八木一夫（1918–1979）の作品は、木村重信によって「彫刻でもない、陶芸でもない、第三のジャンル」と言われ、そこには素材や技術を媒介とする作業を通じた表現を重視する観点が見られる。これは現在しばしば「工芸的」という言葉によって、隣接する領域といわゆる工芸とを差別化する観点と重なるものである。本発表では、現代陶芸を中心に工芸的という観点からの既存の言説を見直すことで、工芸研究の枠組みについて明らかにする。